

■ 書 評



日本の名著論文選集 —精神医学エッセンシャル・ コーパス 1, 2, 3—

松下正明 総編集 中山書店
第1巻 2013年4月 344頁
第2巻 2013年3月 348頁
第3巻 2013年5月 344頁
本体価格 各 8,000 円+税

1980年のDSM-IIIの導入は精神医学に単なる診断の操作化だけではなく、診断を他科の医師にもわかる共通言語とすることで、現代医学の基本理念であるエビデンス研究への統合をももたらした。その結果、RCTを典型とする有意差検定の積み重ねによって精神医学を煉瓦細工のように再構築しようという意気込みが生まれたが、その前提となるのは旧来の精神医学概念が信頼性に乏しいとの認識と、それに代わるべきエビデンスに基づいた医学への期待であった。しかしその結果、これまで作り上げられてきた精神医学の概念を再訪し、背景にある思想、学派の動向を検討するという作業は急激に下火になったように思われる。

EBMの嚆矢となった循環器医学では、この20年間のエビデンスを総合しても、臨床上必要とされる判断の20%程度しか対応できないということが指摘されており、身体科ではEBMは一定の距離を置いて受容されるようになったと感じられる。他方、EBM発祥の米国では、論文からはなかなか伝わってこないが、人から人へのスキルの伝達は非常に重視されており、その訓練に多大な労力を割いている。診断技能、case formulationなど、どの診療科でも鍛えられるところである。近年の日本の精神医学を見るときにもっとも懸念されるのは、知的パラダイムの変動によって、こうした臨床的経験の伝達が途絶しているのではないかということである。

この度出版された「日本の名著論文選集」は、この表題だけを見ると、その内容の今日的な意義というよりは歴史的文献としての立場から出版されたものであるかのように思われるかもしれな

い。その論考の多くは数値にもエビデンスにも還元できない。しかし本書に集められた多くの論考を読むうちに、読者はあたかも一人の患者を前にして、著者から解説を受けているかのように感じられるのではないだろうか。現象のとらえ方、その集約の仕方、現象の背後にある様々な要因のまとめ方など、思わず引き込まれ、時を忘れてしまいそうになるのは筆者だけではあるまい。そのような意味で本書は、単に歴史的文献というだけではなく、今日の精神医学を担う諸氏にとって、まさに臨床経験の伝達という貴重な役割を担っているように思えるのである。私事であるが、著者の中にはすでに故人となった筆者の恩師もおられ、再び親しく教えを受けているかのような懐かしさを禁じ得なかった。

このような文章の特質、価値を正確に規定することは難しい。また臨床的、という曖昧な表現によって理論の偏りやドグマを正当化することがあってはならない。まして歴史的な大家のいうことだからといって、そのまま鵜呑みにすることは是認できないが、おそらく本誌の読者にはその懸念は無用であろう。論旨については読者それぞれに判断があるかもしれないが、こうした論考を精読することの利点は私たちにある皮相な理論にとどまることを許さないということであろう。著者らに導かれて精神現象の深奥に分け入り、論理を切り開く歩みをとともにすることによって、疾患、診断、症状、治療、病態の成因について、新鮮な認識を与えられるように思う。

本書は医学が思想であり得た時代の精神医学の貴重な遺産である。思想というのは人文的な思惟のことだけを指すのではなく、体系的な知識体系の構築を意識しているという意味である。こうした姿勢は研究だけにとどまらない。目の前の患者について単に診断病名に薬を合わせるというだけではなく、その存在を1つの思想として探求しようという姿勢に結びついていたことと思う。これは私淑していた何人かの著者の方々から私が感じたことでもあり、その認識が再体験できたことを嬉しく感じている。

(金 吉晴)